

包はみシステムにより大石雄介が主宰します。

みシステム要領

1. 俳句、散文とも分量に制限なく、締切りも各人の自由とする。
2. 各人は、自稿を読ませたい相手に送稿する。その際、送稿がみシステムによることを明記する。(注参照)
3. 編集・発行権は原稿受取人に属し、集まった原稿から随意に雑誌をつくることができる。その発行、公開等も随意とする。
4. 発行、公開された雑誌の一冊は、出稿者に送本することとする。
5. 発行経費は、発行者の個人負担とする。
6. みシステムの新しい中間への趣旨徹底は、各人の責任とする。

(注) 送稿の際は下記に統一して下さい。

〈当送稿はみシステムによります〉



包・ぱお

12号

2001. 12. 15

包12号目次

大石雄介句録(5) / 大石雄介



大石雄介白録

5 (H13 8/1 8/31)

赤棟蛇あかむらが轆かかれて白くなるまである

頭だけの百日紅だけの日なり

歯はあとのエロ本ちらばる夏の道

戯たふふれている枸杞の実の赤い笑

カスタンク長楕円球のさるすべり

夏の家の言葉か犬かかすかにす

シマツトという露わなものがあるなり

1

(2001) 8/1

月の上に鳥あり零れつづけるよ

汝が夏の町は血の色天に放つ

山椒黄葉と壊れた双眼鏡が入る

焼酎甲類恐龍レポリカともに深衣

隣の子と百合の子ときどき入れ替る

紋もん白蝶はくちょうと夏鳥の薫かほ同いさまに

鬼の子の幼い姉妹紐は打つな

藻の花かたまっている角焼鳥屋

鼯あひのところろ毎日通る瘦せていく

台所かいくつも見える夏の花

2

8/2

驟雨して女子高生は雨となれり
 驟雨してバベルの塔の如くなりぬ
 驟雨して金色の町となりけり
 驟雨上がる花は紫と打ち出す
 驟雨上がるくと黄の壁白き壁
 驟雨の自転車口あけ目を閉いた生きしの
 夕立すぎ風か出てきた頭かな
 稲妻きれきれにころかする町かな
 驟雨して蛾の目大きな町かな
 故に人は花火と打上げ打上げ

4

8/5

嬾くて老人が酔芙蓉となるなり
 日は火を焚けよいちめんのぼろ菊
 あした咲くめまつよいぐさの子かな
 梨畑や人間は水音がするなり
 パラダイスと歌う愛人夏すぎゆく
 鯛の骨は半透明の短夜かな
 鯛の頭に箸を入れると入ってゆく
 鯛の頭を皿にて運い短夜かな
 魚屋驟雨して人には子にも見えぬ
 驟雨して四輪駆動車草食めだす

3

8/4

8/3

(2001)

夏	帽	電	卿	鬼	梨	道	泥	自	明
は	子	気	ら	蜘蛛	畑	の	瀉	転	神
き	お	断	学	の	の	楽	の	車	岳
ら	い	つ	問	の	梨	こ	花	の	か
い	て	て	と	わ	か	こ	を	う	夜
靴	足	酒	い	か	こ	こ	隠	し	は
は	高	も	う	あ	こ	お	し	て	芙
き	蜘蛛	断	化	と	か	は	夏	ぎ	蓉
ら	の	つ	物	十	ら	ぐ	す	ゆ	に
い	礼	て	ガ	年	ろ	る	く	く	引
と	を	秋	ン	の	蜻	蜻	な	な	か
噛	し	雨	ジ	壘	蛉	か	い	な	れ
み	て		ス		か	な	し	い	た
に			河		な	な	い	よ	る
く									る
る									よ
よ									

8/6

6

短	夏	脱	性	夏	短	シ	虫	花	大
夜	す	い	愛	負	夜	ヤ	刺	火	や
の	ぎ	だ	は	け	や	ツ	さ	浴	猫
幾	ゆ	ス	野	の	ま	=	れ	い	ま
重	く	ポ	菜	と	だ	枚	て	て	で
に	こ	ン	並	っ	読	吊	来	し	浴
も	れ	ほ	み	く	ま	る	た	ま	び
組	か	は	に	リ	ぬ	と	シ	っ	て
む	椅	べ	蜘	蘭	本	部	ヤ	た	し
大	子	ル	蛛	の	備	屋	ツ	ち	ま
き	の	ト	の	日	愛	は	を	か	っ
な	か	の	凶	日	す	夏	扱	れ	た
箱	た	ま	鑑	か		の	か	た	雨
	ち	子		な		底	な	り	の
	かな	に						り	花
		夏							火
		至							
		の							
		夜							

5

(2001)

漫画と體など交換し夏終る
 きるきる 蜥蜴とよく会う日であつた
 尾長群れるここわが終のところらし
 虫の声一個一個する眠さかな
 こちら向くわむい體夏の果
 犬の声も科のに行けり短い夏
 同い街灯同い夜露が鳴りにけり
 焼酎あと向日葵の種飽食す
 つぶれた蜂の黄の縞いくすいも乾くよ
 この道屋が掃かれおはぐろ蜻蛉かな

8/9

8/8

8

老いたる夫婦若き野々に惹かれゆくよ
 ほおむき畑まで退潮歌の家
 銅葺きの大箱を組む夏の雨
 鬼蜘蛛つぎ髭の男にあたる家
 蛭蓆たられていまだ恥毛のさま
 ざりがに轆かれてすでに赤い雨水
 ストリープニ基夏は半透明な隅に
 つるつるになるまで田の草を引くよ
 夏田にかけんと大網を編むものかな
 糸瓜の花とすつほんの月あふにあふいるよ

8/7

7

(2001)

雀瘦せて赤のまんまと化したる
並んでゐる大毛蓼と精神かな
隣家一歳の子朝顔より黒い子
虫ゴムてふかニつ妻の自転車に
ほおずき畑熟したり遠い遠い庭
地球抱擁の日や百日紅と心音又
声ほころかつているもの蜥蜴の子
蚊遣を打つ自由玄關台所
向日葵の種降らすとき毛も降らすよ
君なき夏の街灯のかくもあるよ

10

8/10

傾斜保つ天井へ蜘蛛とぼせたり
アウシユビツまで螢光灯は平行ゆく
鮫の油は西日が射せば青むもの子
冷房及はぬあたりの皿や碗の腕
わか思惟は蠅取蜘蛛の艶に如かず
白墨挿しに紫挿して夏の立目
顔まで魚の印打つ夏休み
夏休みの子供は言葉降ってゐるよ
電車と五位鷺かわか路地と行くよ
薄れてゆく月をいくつも見たあとなり

9

(2001)

半身右へ傾いでいる子夏の道
 白鷺の幼鳥は目をそらすか来る
 日に過ぎゆく胡桃ではない大きな実
 百日紅が厚くなるも入ってゆけぬ
 尾長の真似に興いでいる昼寝かな
 自分の頬を殴るといふよ百日紅
 眠い體を自転車にのせ夏の暮
 脱皮して足高蜘蛛がまだ重いよ
 体温計の銀が濃くなる秋の家
 空の音ゆくおしろいの花かな

12

8/13

8/12

百日紅も貫いてくる裏口かな
 フェルトもて夏川に投^{ほう}げるかな
 夏草の隣人には除草剤は打つな
 冷房風太陽風とも我々がゆく
 机上の石二個決水ここに及ぶべし
 百日紅かたい心行ける昼寝かな
 古肩あたり蜥蜴いて昼寝せん
 フルーベリージャムや乾坤は箱ならず
 フルーベリージャムや人の顔の指
 フルーベリージャムや馬刺れ風吹く

11

8/11

(2001)

平和かつ鬱鬱の冷る車にあるなり
 青魚の赤き魚あり夏すきゆく
 高きに群れる蛾の類はわかどこに落ちる
 マウンテンバイクのハンドルを折る夏の道
 夏の火焚くガソロール函つぎ白花
 乳母車に丸入れてゆく夏の暮
 おしろいのきのうの花ときょうの蕾
 存在の闇なるおしろいの花かな
 エイゴリル・リキてふ犬や蘭の家
 青柿の道真向に中学校正門

8/15

14

刺蛾に刺された首を吸いあう二人らし
 やくざびる少年が夏の町の顔
 自転車四人乗り親子よ夏の果
 榎櫃の実かぶつと空気に着くなり
 存在へと足高蜘蛛を避けて出たり
 めまいする體を夏の部屋に立たす
 人間へ蟬吹りて出る日日かな
 夏の果若きらつぎつぎやめるといふ
 明神岳は夏霧にあり君は眠れ
 西日なる路が碍子が飛びきたる

8/14

13

(2001)

君らのこまつよいぐさは寝て見ん
おしろいの花や目をつむり橋を渡る
夏痩せの群雀腹見せて飛いよ
炎天は遠い白鷺が赤くよ
隣の子の最後の向日葵が終った
夏の夜の猫が飛び立つと見えたり
新しい痣は見せよ足長蜂の子
水のような炎天かニつとつれていた
夏の部屋は人滾滾とわかすよ
水となるまで人打つ夏の十字路かな

16

8/17

夏の夜々タバコを吸って胸脹らし
冬風ころがる煙と削むとつ思い
タバコ吸いたるあと月光にさらされて
夏の夜の人と通るタバコの火
夏草も俺も燃えるもののみとつ
まば幼いかわらけつめいに風吹く
虎杖刈つて虐殺というほどに積める
藻の花が外に出ているほくらも出る
遠い家の白い女百言の花
むらさき玉葱の皮はちらばって終りぬ

15

8/16

(2001)

人の家には帰りたくない銀河であれ
銀河ときに氣を失って人のかたち
沢胡桃の大きな木が行く銀河かな
孫娘をなんども露草にこぼすよ
迷路のどとく露草の家家かな
金魚の子か針のよう群れはじめた
小田原の真鯛を七つ造りけり
妻と行く夏の地下街や川のごとし
日よけ鳩の薫よけ小田原の雨傘かな
夏瘦せて岡田典代君的に瘦せたり

18

8/19

山の頂や雨にあり百日紅
黒い銀河の黒い月見草の声かな
泣きながら歩く天の川の自転車
犬や猫は静か天の川の部屋
天の川のぼくは部屋で生死のこと
耳のうしろの痣も銀河のことかな
君は銀河のかるがもは恋人らし
夜眼に白い坂は銀河の器管らし
棒のようには倒れる銀河は乳房して
自転車は銀河の分身入ってくる

17

8/8

(2001)

つめたい指とて人間より酒精を選べ
台風来とひげらとかかかんほか気になる
台風来きのうはへびとくぼを見た
台風来体温計に菌がみのあと
目つむれば豹紋蝶の斑台風来る
平らへの意志マシゴの種が乾く
鶴の子を見ないまま台風に入るなり
台風来焼酎は割らずに耐えよ
台風来タバコの火は菌から菌へ
台風来ただ濡れること坂下ること

20

8/21

夏過ぎゆく大きな足の老人かな
梨道ゆくセクス三人乗り自転車
台風近きほくと道のあいだかな
ほくを通るへちまの花は天の花
君が起きたころほくは八月を過ぎる
蜘蛛好きの子や大き月ほ日焼けせず
夏の夜の酔っぱらい歌へと行くなり
銀河は見えずタバコの目か人の目
夏の夜のほくらほ急坂か好きなり
だからほくら黒い銀河を掘かんすとす

19

8/20

(2001)

台風一過して眠ること断ちたる體
 今朝はめまづよいぐさ最後のサ花
 杜鵑草初花す一年は瘧のゴとく
 足高蜘蛛の脱殻一日そこにありぬ
 こおろぎ黒し破り棄てたる日をっなぐ
 秋の夜の交換日記という毒薬
 自転車か甘えてきたる天の川
 藪枯粒花は揚羽か尻すりおる
 蛇は轆かかれて足あるかゴとくなれり
 秋出水葛にかかりし赤い花

8/24

22

台風来くりかえし聞く小犬の唄
 青柿やタバコ火だけが見える
 台風一過かるかもは草すべるよ
 台風一過して明神岳は青の時代
 台風一過して休耕田のむらさき花
 台風一過おはぐろとんぼのみどりかな
 台風一過して自転車立ち乗りの愛人
 台風一過その夜声の行くことよ
 台風来鶏屋かここにもあるなり
 海豚のゴと西瓜の切身積んでありぬ

21

8/23

8/22

(2001)

存在の暴力の杜鵑草咲き出す
我は墮落に与り銀河は坂を下す
雲の向こうの落日が百日紅かな
足高蜘蛛死せり眼鏡に度を加えん
はかき数える人夏瘦せの頬かな
氷菓抱え人は目をつぶっているなり
立っている人と晩夏がイの話
うなぎ長焼きの中国いろいろの長さよ
朝から晩までごまだら天牛の艶かな
長芽おろせば鼻水のよくな晩夏

24

8/26

人の花が秋の出水の木にかかりぬ
梨屋が梨切る我は頼きことよ
瘦せ犬がとつれていたり葛の花
利蝦の子の眼開かざるを殺せり
亀虫の金の卵は赤いかな
出云いかしらの瑠璃たては我も瑠璃たては
猩猩蠅の寸寸が机を楽しみおり
泣くときは體を打つ弟の木槿
目つむりいる黄金虫ぬむい黄金虫
己に糸かけ蠅取蜘蛛まきと鳴くよ

23

8/25

(2001)

朝顔の隣人というかたちかな	朝顔や人ほ人と立たせている	朝顔の二階という不思議かな	朝顔や肉親とあちこちに残せり	朝顔の見えているのかぼくなり	遠畑の白い朝顔に火が入る	新しい鶴が日日の水路にいる	立つことは澄むこと足高蜘蛛とあり	大陸ほどに茄子のてくぱらと揚げたり	冬瓜の銀 <small>いんぎん</small> がいくつも出て来たる
---------------	---------------	---------------	----------------	----------------	--------------	---------------	------------------	-------------------	-------------------------------------

わが家の野良猫瘦せきって木に入るなり	夏瘦せつつへちまの花の下を通る	壊れた蟬の数を数えて帰ってきた	梨食べつつ自転車くらつかせて来たる	君と連れ去る菊芋の黄花かな	人間たるは迅し乳噴く秋の草	秋出水君にかかりたるものはためく	刈られ刈られかたはみ黄花秋へ出たり	わが宙にきちきちぼったしぼらくあり	芽のようになむい黄金虫かな
--------------------	-----------------	-----------------	-------------------	---------------	---------------	------------------	-------------------	-------------------	---------------

駢頭の人は夏帽五分街区
 郵便ポスト赤から秋へわが街区は
 コロイ機八種芙蓉云といろの街区
 杜鵑草と瑠璃たては育てる街区
 紅ヤサリ刺蛾また刺す街区
 椶櫚宙に突き出す家家の街区
 長三角形の街区坂には胡桃かな
 銀河落ちているときほ個個の街区
 羊羹屋の木槿は底紅の街区
 かやフリくさか好きなの川こ
 と街区かな

28

朝顔やぼくほここに残るよ
 朝顔や見えるように有たいいう
 朝顔や體は行くにまかせん
 朝顔や歴史なかかぶせるなよ
 朝顔の三月君を失いたる
 朝顔や狂気と狂気交いるよ
 朝顔や一人では立てぬ二人である
 朝顔や吊られたれば橋という
 朝顔や人の飢えたるは放置す
 これも街区かな夏草秋草す

27

8/29

(2001)

コカナガ藻は花すぎて入ってゆくよ
 花水不の花あと半年の我有り
 月明やぼくの自転車行きたからぬ
 卵ニつ壊す夏の終りの日
 レモンと憎しみ発酵させて夏終る
 九月になる冷凍あさり身と眠らせ
 この椅子の飢えや殺しや沙漠かな
 三人組が便所に入る花火の次の日
 夏終る日子宮と取るなどと言うな
 四つ切のパンとかまどうま弾むよ

夏瘦せてあおり鳥賊は歯に痒いよ
 夏瘦せてぼくに入ってくるなり
 おしろいばな猫とは知らぬ猫らしい
 天の川と猫が集まる部屋かな
 昼の銀河の鶴はいまだ眉間淡し
 秋の出水のぼくら川草の丈かな
 この夏を越えた足高蜘蛛に礼とす
 眠った子死にゆく黄金虫かな
 夏のあと揚羽は大きくて軽くて
 冬瓜の大きさがもう動かぬなり

—— 13号案内 ——
αシステムにより発行は不定

記12号 定価 1,000円
2001年 12月15日発行
編集・発行 / 大石雄介
発行所 / 双弓舎
〒250-0851 小田原市曾比
2793 大石雄介 方

天	晴	夏
に	れ	終
六	て	る
あ	い	と
け	こ	十
る	も	二
べ	ず	歳
し	ふ	君
泰	濡	ら
山	れ	や
木	の	ゆ
の	朝	ら
花	顔	か
ほ	か	い
	な	